

＜原著＞

大学授業による教育効果と意識変化について  
－精神保健福祉学を中心に－

直嶋美恵子<sup>1)</sup>・井澤 嘉之<sup>1)</sup>・久 智行<sup>2)</sup>

Educational Effects and Awareness Raisings by University Lecture  
- Focused on Mental Health and Welfare -

Mieko NAOSHIMA<sup>1)</sup>・Yoshiyuki IZAWA<sup>1)</sup>・Tomoyuki HISA<sup>2)</sup>

Mental health and welfare is related to both legal systems and medical science. However, ordinary people have no interest in mental health and welfare. This indifference produces undesirable misunderstanding on mental health and welfare. Therefore, mental health and welfare education becomes extremely important to resolve such a problem. In this article, we report educational effects and awareness raisings by university lectures.

**Key words** : psychological health welfare, lecture, social change, teaching effect  
精神保健福祉、授業、意識変化、教育効果

はじめに

精神保健福祉という用語は、精神保健福祉士という国家資格の定着に伴い、一般的に知れわたるところとなった。精神保健福祉は、一方で精神疾患や精神障害に苦しむ人々を対象にするという点で医学の問題と関わりを持つが、他方で現代の法・制度のもとで彼らに対する包括的なケアや多様なニーズの充足を図るという点で、法・制度との関連性も指摘されている。また、彼らの支援には、公的機関や専門職が行う法制度に則ったフォーマルな部分と、ボランティア、自治会などのその地域特有のもの、あるいは家族や友人、近隣の人たちによるインフォーマルな部分が存在するとも言われている。

しかし、多くの国民は、このような精神保健福祉における医学上および法・制度上の問題が直接自分に関与してくるとは一般的に考えていない。この誤解ないし無関心は、精神保健福祉学の構築とその実践による国民全体の幸福の追求にとって望ましいこととは言えない。この点において、教育による精神保健福祉の理解とそれに対する意識改革が重要課題として挙げられる。

そこで、この精神保健福祉に対する理解と意識改革が、「精神保健の課題と支援」という科目の受講生にどのように見られるか検討する目的でアンケート調査を行った。この科目の受講生は、精神保健福祉教育に関心をもっているが、その知識や理解はまだ十分とは言えないため、授業の前後で精神保健福祉

1) 神戸医療福祉大学 (Kobe University of Welfare) 〒679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5  
2) 放送大学 (The Open University of Japan) 〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 (東京文京学習センター)

に対する彼らの考えも変化するものと想定される。

さらに、このアンケート調査の結果に基づき、精神保健福祉法における現状や、今後の精神保健福祉に対する学生の取り組み方、教員の授業の進め方など、今後の精神保健福祉教育全体についてのあるべき姿を探っていく。

## 方法

### 調査対象者および調査期間

放送大学東京文京学習センターで、平成28年5月21日(土)および22日(日)に行われた授業「精神保健の課題と支援」の受講生に対し、2つの項目についてアンケート調査を行った。それぞれの調査項目に回答した受講生の数および年齢・性別については表1に示す通りである。

授業中にアンケート用紙を配布し、22日(日)までに提出するようお願いした。なお、アンケート用紙の配布と回収には放送大学の担当者にご協力いただき、その回収率は100%であった。

### 調査項目

アンケート用紙は、①精神疾患、精神障害に対する考え方が、授業の前後で変わったかどうか、また授業後にどのような点が勉強になった、あるいは理解が深まったと思うか、②あなたやあなたの身近な人が精神疾患に罹った場合、どのような対応を望むのか、またあなた自身はどのように対応するのか、についての2項目から成り、無記名とした(資料1参照)。

## 結果

まず、精神疾患、精神障害に対する考え方が授業の前後で変わったかどうかについて、変わったと回答した学生は3名、変わらなかったと回答した学生は9名であった(表2参照)。勉強になった点では、法・制度等と回答した学生は9名、医学等と回答した学生は7名であった(表3参照)。また、授業後に理解が深まった点については表4にその具体例を示す。

表1 それぞれの質問に回答した人の年齢および性別

年 齢	20～29		30～39		40～49		50～59		60～69		70～		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
質問1		2		3	6	4		6	2	2	1	1	27
質問2		2		3		10		6		4		2	27

表2 授業前後での精神疾患、精神障害に対する考え方の変化(年齢・性別)

年 齢	20～29		30～39		40～49		50～59		60～69		70～		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
変 わ っ た				1	1			1					3
変 わ ら な か っ た		1			4	1		1	1			1	9

表3 勉強になった点で法・制度等あるいは医学等と回答した数（年齢・性別）

年 齢	20～29		30～39		40～49		50～59		60～69		70～		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
法・制度等		1		2	3	1		2					9
医学等		2			1			2		1	1		7

表4 自由記述による回答例

回 答	人 数
専門職への理解	2
法・制度への理解	9
うつ病で休職する人が身近にいるので、理解が深まった	3
うつ病で休職する人が身近にいるので、対応への道標ができた	2
知らなかったことを知ることができた	4
病気の名前は知っていたが、そのものについて理解ができた	7
病気を支える人の大変さが理解できた	1
自分の精神保健福祉の今後を考えた	3
精神保健福祉の現実を知ることができた	3
精神保健福祉について理解が深まった	2

次に、支援における対応の仕方について、自分や身近な人が支援される立場になった時、どのような対応を望むかについて、フォーマルな対応と回答した学生は8名、インフォーマルな対応と回答した学生は12名で

あった（表5参照）。また、自分が支援する立場であれば、7名の学生がフォーマルな対応をすると回答し、11名の学生がインフォーマルな対応をすると回答した（表6参照）。表7に回答の具体例を示す。

表5 支援してもらおう側の対応（男女別）

年 齢	20～29		30～39		40～49		50～59		60～69		70～		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
フォーマル		1		2	1			2		2			8
インフォーマル		1		2	1	2		3	1	1	1		12

表6 支援する側の対応（男女別）

年 齢	20～29		30～39		40～49		50～59		60～69		70～		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
フォーマル				1	1	2		1	1	1			7
インフォーマル		1		1	2	3		2	2				11

表7 自由記述による回答例

回答	人数
医療機関を受診する	7
専門施設の利用	7
周囲に理解してもらえるようにする	7
社会の中で生活したい	4
身近な人の場合、積極的に関わりたい	1
同情ではなく、共感し理解する	3
経験者から話を聞く	2
(患者の)話を聞き、否定しない	4
生活改善をする	1
治る病気として接してほしい	1
人としての尊厳を守る(その人らしく生きる)	3
医療と福祉のインフォームド・コンセントをきちんとしてほしい	1
病気の早期の気づき、早期治療	1
情報が欲しい	5
患者を支える家族が楽に、楽しくケアしたい	1
正しい情報の理解を促す	2

前述した2つの質問項目に対して求められた回答以外に、授業における形式および内容に関する記載があった。授業における形式面で資料配布を希望した学生は8名、板書を希望した学生は2名いた。また、授業における内容面で10名学生は現状のままでよいと回答し、3名の学生はさらなる知識の吸収を希望した。

## 考察

### 質問1

授業前後での考え方の変化の有無については27名中12名が回答した(表2参照)。これは、質問1に対する回答が自由記述であったため、変化の有無よりもどのように理解が深まったかについての記述が多かったことによる。表2を見ると、男女とも変化なしの方が多いが、これは精神疾患や精神障害に対し

て自分自身の考え方をすでに持っているが、「精神保健の課題と支援」の受講後にその知識や理解がさらに深まったと考える学生が多かったことを意味している。

特に、理解が深まった、あるいは勉強になった点として多かったのは法・制度および医学関係であった(表3および表4参照)。逆に言えば、精神保健福祉における法・制度および医学について、受講前に知っている学生は少ないことを示唆している。

### 質問2

アンケートの回収結果から、回答の多くをフォーマルな対応とインフォーマルな対応に分類することができる。表8に示すように、自分が支援する側でも、支援される側でも、その対応にフォーマルなもの(15名)よりインフォーマルなもの(23名)を求める方が多かった。しかし、この結果は支援の仕方が

表8 支援における希望する対応方法（男女別）

		男	女
対応してもらう側	フォーマル希望	1	7
	インフォーマル希望	3	9
対応する側	フォーマル希望	2	5
	インフォーマル希望	4	7

フォーマルかインフォーマルかの2者択一の是非を問うのではなく、むしろフォーマルな対応を軸にインフォーマルな対応がそれを包み込むような共存した形態の支援が望ましいことを示唆している。

### 結論

精神保健福祉教育について、法律的な知識と医学的な知識の双方を求めている学生が多いことから、両方の知識や理解が深まるように教育していく必要があると思われる。特に、今回の調査から、制度のみならず、現状を伝えることで学生が自分のこととして置き換えて体得することが可能であることが分かった。したがって、今後の教育においては、男女差も考慮しつつ、知識ならびに現状を有機的に結合することで授業を進めていくことが肝要である。

### おわりに

今回の調査において、当初の目的に対して一応の結果を得ることができた。しかし、データ数が多くなかったため統計的分析ができなかった点や、今回のアンケートでは分からなかった課題もある。今後は、今回の結果を活かしつつ、他の授業や他の学生を調査対象に加え、授業時間が異なる場合の教育効果についても研究していくことが望まれる。

### 【引用・参考文献】

- 1) 久智行：医療コラム第一回 医師の常識、社会の常識、日本アルトマーク医師学 < <http://ishimanabu.medy-id.jp/column/category/3> >、2009,1,1
- 2) 久智行：医療コラム第二回 自分のやりたいこと、日本アルトマーク医師学 < <http://ishimanabu.medy-id.jp/column/category/43> >、2009,1,19
- 3) 小谷みどり：介護されることについての意識－主として性差の視点から－、LIFE DESIGN REPORT SUMMER(7)、pp.13-22、2014